

日本語の複文における分析再帰代名詞「自分」

(統語論と意味論から見て)

Anggarini Restiani Sarean

0742005

マラナタ キリスト 大学

文学部 日本文学科

バンドン

2012

I. 序論

日本における再帰代名詞は、「自分」の言葉で示される。英語と日本語の再帰代名詞の間にいくつか非常に明確な違いがある。このうち、英語の再帰代名詞で主語の種類によって分けられている。日本の再帰代名詞は分割されていない。日本語では全ての主語の再帰代名詞に「自分」を使用する。英語の再帰代名詞の先行詞は、客語を参照することができるのが、日本語では、再帰代名詞の先行詞は文の先行詞の主語でなければならない。

例： A. John が Bill に自分のことを話した。

 B. John が Bill に自分の写真を見せた。

上記番目の文では、「自分」の先行詞は文 A と B の主語として John である。久野は以下のように説明している：

“In English, the antecedent of a reflexive pronoun can be either the subject of the sentence or some other element (for example, the object of the sentence). In Japanese, on the other hand, in the ordinary style, the antecedent of a reflexive pronoun must be the subject of the sentence.”(1990:292)

英語では、再帰代名詞の先行詞は文や他のいくつかの要素（例えば：文の客語）の主語となり得る。日本語では、通常の形式、再帰代名詞の先行詞は文の主語である必要がある。

Bill は二つの文に主語ではなかったので、このように、Bill は A,B の文に「自分」の先行詞にすることはできない。さらに、「自分」は願望を持っていない先行詞を持つことはできない。言い換えれば、「自分」の先行詞は、主語が生物で生命をもっており、また無生物を使用することはできない。これは、次のように久野によって開示された：

“The antecedent of zibun ‘self’ in Japanese must be something that is animate and has will power”(1990:291)

日本語では、「自分」の先行詞は、何か命を持ち、意欲を持っている。

再帰代名詞の「自分」は自分の先行詞と同じ句にできなくても良い。辻村は次のように説明した。

“In Japanese zibun and its antecedent need not be within the same clause”(1996:218)

日本語では、「自分」と自分の先行詞は同じ句であってはならない。

辻村いうとおりに、「自分」は常に一番近い主語を参照していない、換言すれば「自分」の言葉の先行詞は、常に同じ句の対象ではない。したがって、復類の主語を持っている複文は「自分」は自分の先行詞が曖昧になりかねない。

II. 本論

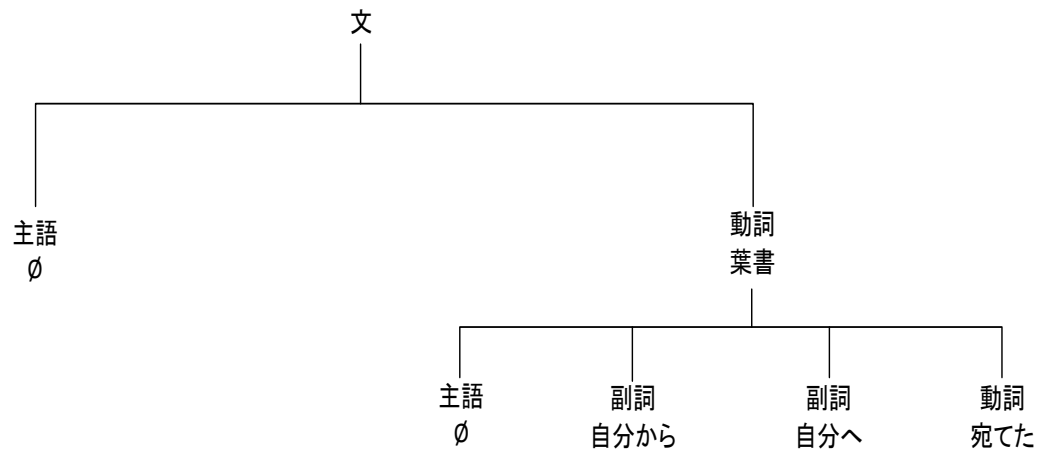
本研究では五十データを小説から抽出した。分析のデータは再帰代名詞の「自分」が含まれていた複文の形で、曖昧文を示した。

この文の下にあるデータでは再帰代名詞の「自分」は、常に同じ句に、または同じ文に先行詞が存在する必要があることを証明している。

1. (8) 真奈枝のこの郵便箱には、妙な葉書が入っているはずだ。

自分から自分へ宛てた葉書。(SUSS19986:100)

データ(8)は、二つの文章があり、二番目の文に「自分」がある。最初の文では再帰代名詞の「自分」がない。しかし、再帰代名詞の「自分」は二番目の文に含まれている。その文に、「自分」が二つある。最初の「自分」に助詞「から」が続きその後は副詞である。そして、最後の「自分」は宛先副詞として機能する。



IC の分析を用いて説明すれば、二つの再帰代名詞の「自分」は、主語は消えているのと同じ先行詞を指す。二つの再帰代名詞の「自分」があるため消えた主語と同じレベルにある。

データ（８）の意味は、文章の再帰代名詞の「自分」の意味は先行詞に従って解釈することができる。「自分」の先行詞の中に消えた主語は再帰代名詞である文章や談話の文脈で見ることができる。最初の文の消えた主語は、真奈枝に含まれる主語を指す。だから、再帰代名詞の「自分」の意味は、最初の文真奈枝の主語である。

III. 結論

それを分析したデータを収集した結果、日本語文における再帰代名詞の「自分」の概念は、それが参照する先行詞として再帰代名詞の「自分」の関数であると結論付けることができる。日本語の文章では、

「自分」は性別に依存せず一般的に使用することができる。したがって、曖昧な言葉が複数の主語を持っている日本語の文章がある。それが参照している自分の先行詞の意味を持つ言葉と常に同じである。

DAFTAR ISI

Kata Pengantar.....	i
Daftar Isi.....	iv
BAB I Pendahuluan.....	1
1.1 Latar Belakang.....	1
1.2 Rumusan Masalah.....	9
1.3 Tujuan Penelitian.....	9
1.4 Metode Penelitian dan Teknik Kajian.....	9
1.5 Organisasi Penulisan Skripsi.....	11
BAB II Kajian Teori.....	13
2.1 Sintaksis.....	13
2.1.1 Kalimat Majemuk Bahasa Jepang.....	16
2.1.2 Pronomina Refleksif Jibun.....	19
2.2 Semantik.....	27
BAB III Analisis.....	29
3.1 Kalimat yang memiliki 1 Subjek.....	30
3.2 Kalimat yang memiliki 2 subjek.....	37
3.3 Kalimat yang memiliki 3 subjek.....	60
BAB IV Kesimpulan.....	66

SINOPSIS.....	vi
Daftar Pustaka.....	x
Korpus.....	xiii
Data.....	xxix